

---

# 竹林奇譚 外伝一 かけがえなき大切なものの

すばる & ぴの子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

竹林奇譚 外伝一 カケがえなき大切なもの

### 【NZコード】

N60910

### 【作者名】

すばる&ぴの子

### 【あらすじ】

『竹林奇譚』の外伝。

竹林でのある日のお話。

それはある晴れた秋の日のできじと。

この日、雲隱<sup>クンイシ</sup>は日課の早朝の散歩から戻つてくると、これまたいつものように、朝食を求めて居間へと足を踏み入れた。

が、いつもとどうすが違う。

通常であれば、雲隱が戻つてくる時間を見計らつて、学然<sup>シュエラン</sup>が朝食の準備をしてくれていた。

が、この日は違つたのだ。

居間は、雲隱が早朝に出たときとなんら変わりなく、卓の上にも何も置いていない。

しんと静まり返つた居間を抜けて、台所を覗いてみると。

「学然？」

だが、台所の主はそこにはいなかつた。

明らかに朝食の準備をしていたのだ、とわかる小麦粉やら野菜やらはそこに散乱したままで、学然は忽然と姿を消していった。

（何かあつたのでしょうか……？）

食事を作つている途中で、それを投げ出すなど、学然らしくもない。

何かがあつたとしか思えなかつた。

心配になつて、しばしの間、台所をうろついた後、雲隱はふと思いつて居間へと戻る。

そこから中庭に続く扉を開けた。

もしかしたら、そんな勘が働く。

扉を開けたとたん、雲隱の視界に飛び込んできたのは、見事な竹の青。

その中に、これまた見事に色づいた楓の樹。

いつみても、この対比はとても美しい。

雲隱が思ったとおり、学然はその傍らにいた。

背後から声をかけようとして、寸前で雲隠はそれをやめた。

心あらず、といった感じで学然は楓を見上げていた。その瞳は深い悲しみで満たされていた。

そして、何度も学然はため息をつく。

雲隠は心がぎゅっと締め付けられる思いで、彼の背中を見つめる。思えば、学然はいつもこの季節になると、考え込むことが多くなる。

それがなぜなのか、雲隠は知らない。

彼に聞いたこともあつたけれど、学然自身、どうしてなのか皆田わからぬ、という感じで苦笑された。

もしかしたら彼がここに来る前に、何かあったのかもしれない。秋といつ季節に。

(いえ……でも、学然は)

静かに首を振ると、雲隠は背を向け歩き出す。そして、そのまま庵を出ると、先ほど散歩で訪れた泉のほとりへと、再び足を向いた。

「ぽーぽー」と清らかな水を湧き続けさせる泉を前に、雲隠は瞳を閉じた。そして、ゆっくりと息を吐くと、近くにある石へと腰を下ろす。

(わたくしは……なんと役立たずなのでしょう……)  
彼があんなにも何かに心を痛めてこるところに、自分は何もできない。

学然が落ち込んでいる理由を打ち明けてくれないのも、自分がそれだけ頼りがないからかもしれない。

妙に情けなくなり、雲隠は視線を地に落とす。  
と、そのとき。

ぽん、と肩に触れるやわらかい感触。  
振り向けば、そこには虎が一匹いた。

「どうした？」 雲隠

「ああ、あなたでしたか」

珍しい来客に、雲隠の頬は緩む。

「しばらくお見かけしませんでしたね」

「んー、ちょっとな」

虎は傍らにおいてあつた小さな袋を口でくわえると、それを雲隠の手に置いた。

「ほらよ」

これまた珍しい虎の行動に、雲隠は笑つた。

「どうしたんです?」

「そりゃあ、こっちの台詞だ。何があつた?」

問われて雲隠は憂い顔で答える。

「わたくしは、やはり役に立たない人間なのです」

「そんなことないだろ?」

人間で言えば、まるで首を傾げるかのようにして、虎は雲隠の言葉を否定する。

「お前を訪ねてたくさんの人来る。お前はそういうの願いを叶えてやる。十分役に立つていいよな?」

ゆづくと雲隠は首を振った。

「けれど、わたくしは身近な人間一人の心を救うことすらできていないのですよ……」

雲隠は視線を地に落とすと、自嘲気味に笑つた。

「んー、イマイチよくわからんんだが、具体的に何があつた?」

「学然のようすがおかしいのです」

「学然……」

ええ、とうなずき、彼の先ほどの様子を伝える。

「そ、そうか」

急にそわそわし始める虎。

「どうか…しましたか?」

「い、いや」

否定はするものの、明らかに拳動がおかしい。

目を泳がせ、何度もぱちぱちと瞬きをした。

「よ、用事をな、思い出した！ 帰る…帰る…」

腰を上げると、ぐるりと踵を歸してあわただしく、その場から去

ろうとした。

そんな虎に向かつて雲隱は思わず叫んだ。

「月芳！」

ぴたりと虎が立ち止まる。

声をかけてしまったものの、次に何を言つべきか考えてもいなかつた雲隱は、しばらく次の言葉を発することができずになつた。つい口にしてしまつた彼の本来の名。

彼は何も言わず、雲隱の次の言葉を待つていた。

「もし……」

雲隱がようやく口を開く。

「もしあなたが望むなら……」

虎はしばし無言でいた。

だが、低く言葉を返す。

「いや……いい。今はまだ……」のままで

虎は振り返りずに、今度はゆっくつと歩き始めた。

「ゆーんーーーんーーー！」

虎の姿が見えなくなつた直後、ものすゞい形相で学然が駆け寄つてきた。

「どうしたんですか？ 学然、あなたその顔……よくないですよ」

眉をひそめた雲隱になぞかまいもせず、学然はまくし立てた。

「トーリはどこにきやがつた！」

「は？」

「トーリだ、トーリー。あこつ、またしても俺の会心の作をへ

「学……然？」

ぎりりと学然は雲隱をにらみつける。

「まあかかくまつたりしてなによな？」

「 学然……」

ふうと雲隱は息をつく。

「 ど」「行つた?」「

何がなんだかわからないままではあるが、学然に聞いても今はまともな回答など返つてきそうもない。

雲隱は諦めたように、虎が去つていったほうを指差す。

「 もう帰つていつたと思ひますが?」

「 くつそーつ!」

学然はバツと雲隱を振り返り叫ぶ。

「 食事は卓の上にできてる! 餅頭はないけどな! 恨むならトラを恨め!」

言つて、そのまま走つて虎が去つた方向へといつてしまつた。まるで嵐のよつと去つていつた学然を見て、雲隱は優しいまなざしを向けた。

やつぱり学然はああでなくては。

(本当に、彼には救われてばかりですね……)

彼がいてくれたから、自分は今もこうして……待ち続けることができているのかもしれない。絶望せずに。

心地よい風が雲隱の傍らを駆け抜けた。

今日も竹青庵のあるこの竹林には、穏やかな時が流れている。

(後書き)

このお話は『竹林奇譚』の外伝になります。  
もともとはサイトできり番のお礼として書かせていただいたものと  
なります。

こじで出てきた虎の「円芳」は、この後様々な物語に出て来る」と  
になります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6091o/>

---

竹林奇譚 外伝一 カケガエナキ大切なもの

2011年1月9日20時41分発行